

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 千田 沙也加

論 文 題 目

クルー・チャッタンの生きられた歴史にみるポル・ポト政権
期後カンボジアの初等教育－地方都市における教師への聞き
取り調査から－

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	服部美奈
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	松下晴彦
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	松本麻人

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文は、ポル・ポト政権期後の国家の復興・再建期であり、社会主義体制下であったカンプチア人民共和国期（1979-1989年、以下、人民共和国期）の初等教育の再建を、個々の教師による生きられた歴史から考察するものである。これによりローカルで個別的な観点から歴史を再構成し、同時期の初等教育の特質を明らかにすることを目的としている。ポル・ポト期に行われた教師を含む知識人の粛清により、人民共和国期は極端な教師不足に陥った。そのため、同時期には資格を問われることなく緊急の対応で任命された教師たちの存在があった。その教師たちがクルー・チャタンである。

本論文は、序章と終章のほか6章から構成される。第1章から第3章を第1部、第4章から第6章を第2部とし、第1部では政権側が構想した教育、第2部ではクルー・チャタンが経験した教育を考察している。

第1章は、カンボジア教育の歴史区分と各時期の特徴、小学校教員養成制度の変遷を概観するとともに、ベトナムとの政治的な関係が強まった人民共和国期の社会主義国家体制と教育政策、さらに同時期の教育状況が考察されている。

第2章は、政権側の逐次刊行物である機関紙『カンプチア』を分析し、政権が構想した国民教育像が考察されている。考察からは、教育再建の方向性が社会主義思想に求められたこと、とりわけ先行研究でも指摘されてきた教育再建に対するベトナムの関与が明らかになった。一方で、ベトナムへの同化や過度な同調は目指されておらず、ベトナムはあくまでも支援者として描かれていることが新たな知見として示された。

第3章は、1980年に公布された『普通初等教育カリキュラム』の検討を通して、政権によって構想された教育再建がカリキュラムにどのように反映されたかを、「クメール語」と「労働」の2教科に焦点をあてて考察している。考察からは、教科「クメール語」の学習時間が他教科よりも重い比重であったこと、クメール語は「クメール人」の言語ではなく「カンボジア国民」の言語として位置づけられていたこと、教科「クメール語」の目的には感情的で単純化された反ポル・ポト感情の形成が明記されていたことが明らかになった。そして「労働」は社会主義思想にもとづいた教科であり、ベトナムの影響は確かにあったものの、そのことをもって教育が「ベトナム化」されたとは単純には結論づけられないことが示された。

第4章は、4人のクルー・チャタンのライフヒストリーから、クルー・チャタンによる人民共和国期の小学校での教育実践と、クルー・チャタンに共通する経験としての「引き抜かれる」（緊急的な措置として教師に任命される）ことの具体像とそれに対する意味づけが考察されている。考察からは、小学校教育の再建に

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

高学歴のクルー・チャットンが果たした役割の重要性、「引き抜かれる」のは強制でも自主的でもなかったこと、「できる人ができない人を教える」という政権側のスローガンに対するクルー・チャットンの意味づけが明らかにされている。

第5章は、24人のクルー・チャットンの事例と、元児童によるクルー・チャットンに対する認識の分析から、クルー・チャットンとはどのような人々であったのかを詳細に考察している。その結果、クルー・チャットンは、先行研究が結論づけた「読み書きできる程度」の教師ではなく、教師経験や学歴の有無を問わず「引き抜かれる」経験をした教師であったこと、同時にクルー・チャットンという自己認識を共有する教師のまとまりであることが示された。さらに、政権側がポル・ポト政権期以前の教育を否定し、新しい教育の再建を目指していたにもかかわらず、多くのクルー・チャットンは過去の学習経験を肯定的に捉えていたことが明らかにされている。

第6章は、24人のクルー・チャットンと16人の元児童による経験と認識からみた初等教育再建の特質を、「クメール語」「政治道徳」「労働」の3教科に焦点をあてて考察している。考察からは、クルー・チャットンが「クメール語」教育の目的を反ポル・ポト思想の形成として捉えていなかったこと、「労働」を社会主義の理念にもとづいた主要な教育と認識していなかったこと、他方で元児童は「労働」を通して生きることを学び、集団の「労働」を通して団結する喜びを学んでいたことが明らかにされた。

終章は、本論文の総括と今後の課題が示されている。政権が目指した社会主義教育とクルー・チャットンのライフヒストリーから描かれる初等教育の特質、クルー・チャットンであることの特質に関する総括が行われ、本論文の締めくくりとしてカンボジアの教師の質に関する議論への示唆、「小さな比較教育学」の提言、今後の課題が述べられている。

本論文の特色と学術的意義は、以下の点である。

- (1) 国民教育の復興・再建期として最も重要でありながら先行研究ではほとんど検討されてこなかった人民共和国期の教育の特質を明らかにしている。
- (2) ライフヒストリーという研究手法により、クルー・チャットンの生きられた歴史をローカルな視点から描き出すことに成功している。
- (3) 現地での丹念なフィールドワークを通してのみ得られる貴重な一次資料や関係者へのインタビューを通してオリジナリティに富んだ考察が行われている。
- (4) クルー・チャットンを読み書きできる程度の教師として一面的に捉えてきた

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

先行研究に対し、それを覆す新たな知見を提供している。

- (5) 政権が構想した社会主義思想にもとづく国民教育が教育現場でどのように実践され理解されたかをクルー・チャットンと元児童の語りから描き出すことを通して、先行研究が論じてきた固定的な社会主義像の修正に成功している。

本論文に対して、審査委員からは以下のような疑問点と指摘がなされた。

- (1) 政権側と現場側という視点で考察が進められているが、両者は明確に分けられるものなのか。
- (2) 教師と元児童のライフヒストリーをもとに当時の教育を描いているが、仮に教育関係者ではない人々のライフヒストリーを収集した場合、両者の経験と認識は異なるのか。
- (3) 本研究は比較教育学研究のなかでどのように位置づけられるか。ライフヒストリーという研究手法が、従来の研究枠組みを問い直すような示唆を与えているか。
- (4) クルー・チャットン自身が自らを振り返るような研究はないか。クルー・チャットンが、「できる人ができない人を教える」という政権のスローガンを自らの動機づけとする際、単純にそれを受容したというよりも何らかの解釈の転換があったのではないか。
- (5) ベトナム化という認識は主としてアメリカ側のものではないか。現地の受け止め方はそれとは異なるものだったのではないか。
- (6) 「引き抜かれる」状態をもう一步掘り下げて、カンボジアの風土やカンボジア人の気質として説明できる可能性はあるか。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は研究の限界や課題についても十分に認識しており、質疑に対する回答も適切かつ妥当なものであった。また、指摘された課題は、今後の研究によって対処していくことが可能であるとした。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（教育学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。